

となるにつれて美なりしものが良となり可となる  
之は即ち幼稚園の關係の有ること、幼稚園時代に  
物をテヨク〜と教へ過ぎるからではないかと思  
はれる。

幼稚園を経たる小兒は身體の發育の著しきを以て  
ほこりとすべきである。かの早熟せしむるといふ

ことにつきては大に注意すべきであつて神經を刺  
戟せずして身體を發育せしむべきである、手指、

聽覺の練習なりとて種々のことをなすは其程度を  
考ふべきである、子供には小さきことをなさしむ

るよりは大きなことを爲さしむべきで室内で豆細  
工をなさしむるよりは庭に出て蟬をとらする方が

よい。  
日本人は大に身體の發育を必要とするので幼稚園

に於ても之を第一とすべきである。  
幼稚園は最初よりして梅花の美しきものを咲かし

めず野生的に發育せしめ、最後に於て立派なる花  
を咲かしむべきである。

鷹揚なる人物をつくるべきである。  
而して將來に於て貧民に對する幼稚園が出来たら

ば午食牛乳等を與へる様にしてほしいものであ  
る。

幼稚園事業をして發達せしむるには國家が注意し  
て保母の養成といふことに注意するの必要がある

又小兒の性質を學問的に研究する又社會にありて  
も幼兒教育事業を大に獎勵すべきである。(終り)

# 子供の臆病

倉橋惣三氏談

▲子供は皆臆病 坊やは何故斯う弱虫だらうとお

父様が嘆息すると、さう言ふ人も子供の時は、  
矢張り臆病だつたと、祖母様が笑ふ、私が今此様

な事をお話するのを、母親が聞いたら、定めし笑  
ふだらう、實際私も子供の時は非常に臆病で夜

などは到底、獨りで外へ出られなかつた、併しこ  
れは諸君も同様、共通の性である、決して可笑し

いものぢや無い、  
▲子供の怖がる物 其處で先づ、子供の怖がる物

の種類を分けると、第一感覺から起るもので、大きな聞き馴れぬ聲、強い光などである、どつちかと言へば、子供の時は眼に見る物より、音の方が早く感じるから、どうしても見る物より音の方を恐れる傾きが有る、次が場所、高い所、廣い所、闇、閉塞、ひとりぼつち迷子、などである、其中で閉塞と言ふのは、眼を塞がれるとが、鼻を押へられるとか言ふ種類で、子供にとつてはこれが非常に怖い、それから自然界で云へば、火、風、海雲、電、雷、人ならば他の伯父さん、泥棒、巡查先生、加藤清正などは時に依つて恐れるもの、一つである、知らない伯父さんなどと言ふのは、殊に恐れるやうに思はれる、それから變怪では幽霊化物、天狗、鬼、うぶめ、此うぶめと言うのは、昔言傳へられたもので、夕方軒下に小供が立つて居ると、連れて行つて了ふ、と言ふ幽霊の一つ、それから雜の部で言へば、夢、病氣、貧死、罰、目、齒、瀧車、鐵砲、力などで一體目と言ふものは、非常に愛を顯はすもので、殊に婦人などの眼は、さうである、併し中には寒いやうな眼、と言

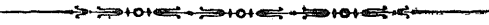
ふやうなものも有る……さう言のを怖がる、或は睨むと言やうな事、一ツ目小僧、三ツ目小僧なども眼の付様で非常に怖い、それから齒で元來齒は怖い物で、喰着とか噛ちるとか言ふ事が有るのにも拘はず何故接吻を愛情の濃な事と爲て有るだらう？畢竟それは、お互に喰付くとか、噛るとか言ふ怖い物を安心して許して居るからだ、と或る學者は言つて居た、

▲子供に怖い條件 不意、異常、茫漠、力の壓迫後くらひ事、自らの頼無き感じ、苦痛の豫期などは、子供の怖る條件であつて、其内の茫漠は、所在、形、運動と斯う三つに分ける事が出来る。その中で形——語り化物の技術などで、形の定まつて居ない物は恐れるものである、例へば大入道にしても一定して居る形だつたら、左程にも思はな

いだらうが、大きく成るかと思へば、一寸法師のやうになつたり、此の定まらないのか、非常に恐ろしい、今昔物語の内、常に自分の腕の有るのを誇り、或る男が有つて、常に自分の腕の有るのを誇りして、太刀を枕元に横へて威張つて居た、所が或

時女房が慌しくやつて来て、大變です今臺所に泥棒が来て探へて居ますと言つて、其處で其男は太刀を提げて行つて見ると、大入道が太刀を提げて立つて居る、歸つて来て此事を女房に話すと、自分の見たのと丸ッ切違つてる、又女房が行つて見ると今度は居なかつた、と書いである、昔の諺にも鬼も見馴れたるは宜しと言ふ事がある、始終見付けて同じ形であつたら左程恐ろしくもない者である、これも昔の事だが、兩國橋に化物が出ると言ふ評判が立つた、其所で或男が何に大入道だの三ツ目小僧などは怖くないと、大變威張つて行つて見ると、大入道でも三ツ目小僧でもなく目も鼻も何も無のつべらぼうの女が出て、それで其男は恐れて逃歸つたと言ふ話がある、是等もつまり形の茫漠である、それから原因が不明で動くもの、例へば闇の中へ這入ると、色々の形の物が彼方へ行つたり、此所へ行つたりして、何となく薄氣味が悪い、これは眼球の生理的作用であるが所を形、運動などの茫漠に合する恐しさである。▲恐怖に勝つもの、子供が恐怖に打勝つものは一

沈着冷静、二勇敢なる資性、三快活なる性質、四強き意志、五明かなる智識、六保安の念、七信賴の感、八自彊の具等を備へる場合で、これはペイン氏の説であるが、或人が五十人の小供に化物が出たら、如何すると聞いた事がある、さうすると四十九人迄は皆逃げると答へたけれども五十人目の九才になる小供が夜ならば逃げるけれど、晝間ならば切つて了ふと言つた、成程晝と言ふ事は、小供にとつては大丈夫といふ、一つの保安の念で在る、自彊の具も其通り、相當の要意がしてあれば恐しくはないのである。▲臆病の由來、臆病の原因は先づ第一が經驗による恐怖、第二想像による恐怖、第三本能による恐怖、第四病的の恐怖から來るものである、第一の經驗によるものは、自らの經驗と、他から教へられたもの、と斯う二つに分ける事が出来る、是等は言ふ迄もなく、自分で怖がたつと思ふ事、他から聞は怖いと云ふのは、所謂進化論上の祖先から傳は



つて来たものであつて、經驗から起るもの、想像から起るものとは別物である、昔藤原清河は非常に猫を怖つた、これは經驗でも想像でもなく、性來怖いのである、それに就いて一つ面白い話がある、清河が或時年貢が滞つてなかく、收めなかつた事があつた、其の時に役人達が相談して、どうも仕方が無いから、猫を連れて行つて脅かして取らう、と斯う言ふ事になつて、清河の家に猫を連れて押掛けた流石の清河もそれには閉口して、とうとう年貢を收めたと言ふ事である、第四病的の恐怖、これは三歳ぐらゐから七八歳ぐらゐ迄よく有る事で夜半にヒョソコリ飛起きて、泣出したり甚いになると意識をさへ失ふ事がある、これは物事に激しく感動した時とか、消化器の關係、或は親達の神經質などから遺傳されるもので、夜恐怖の恐れと言つて居る

▲恐怖の結果 先づ恐怖の結果を内外に分けて言ふと、外の方では逃げて隠れる生理上の變動、身がすくむ、全身強直、死(氣絶)、病氣などである殊に生理上の變動は實に恐しいもので、分泌物に

變化を起したり、第一脈搏が非常に早くなる、心臓の鼓動が激しくなるなども、吾々の常に經驗した所である、時によれば母親が驚いた爲めに、小供が死んだと言ふ例さへある、それはどう言ふ原因かと言ふと、恐怖の結果、乳に一種の變化を起した爲めなのである。

▲ホピヤ 恐怖の結果病氣を惹起す例も又尠くない、これはホピヤと言ふ一種の疾病で、彼の有名な彼得大帝なども、橋の上を歩くと、必ず病氣になつたと言ふ話であるが、之も一種のホピヤである、内の方では、それが爲めに愈々臆病になるとか、疑心暗鬼とか、自己的 邪推、或は迷信などを呼び起す基となるものである。

▲恐怖の利益 併し此恐怖と言ふ事が、又一面から言へば、非常な利益となるもので、まづ危害の豫防(實際生活上)注意の聚中、是などは何事に限らず意を用ゐて、詰まりは用意周到、智識を啓發する基ともなる、それから暴慢の抑制で、世の中に強がる者ばかり居たならば、決して社會、道徳などが、保たれるものでない事は今更言ふ迄も

無い話である、又一つは自然宗教的の觀念を生じて、崇美、敬虔などの心さへ、起させる。

▲恐怖の教育 子供には此の恐怖と言ふ事に就いて、漸々と教育する事が必要である、まづ中を三つに大別して甲を爲てならぬ事、乙をすべき事、丙を一體の方針とする爲てならぬ事は、子供を戲

れに脅す事、これなどは世間に能く有る事でお父さん達が子供の怖るのを見て態々種々な真似をして脅す、そして其驚方が面白など、悦んでる人が随分ある、これは大に注意すべき事である、

それから教育手段として脅の濫用、恐れを恐れで癒す事などは大に考へなければならぬ。

▲お伽噺、芝居 彼のお伽噺、子守唄、芝居なども大に注意を要する、今見た所、面白と言ふ事のみと主眼として、唯恐しい怖いと云ふのを、土

臺として書いた本などが随分と多い、これ等は徒らに小供の恐怖心を強らしめるばかりで、何の役に

も立たない、元來日本の化物は、怖いと云ふばかりで極めて無意味である、先づこれからして第一

に改良しなければ行けぬ、其處へ行くと西洋の化

物などは進んだもので、花の中でダンスを行るとか、歌を唱ふとか少しの恐しい味も無い、化物と言へば些細の問題のやうであるけれども延いて言へば國家的の問題である。

▲教育上の問題 終りの丙一體の方針はスタンレー

ホール氏の説であつて、教育上の問題として恐怖は、棄つべきものに非ず、導くべきもの也、本

能的恐怖より道徳的の畏怖へ、威嚇的恐怖より崇

美的畏敬へと斯う言つて、以上の如くに恐怖は一面恐しい結果を生ずると共に、又一面には利

益となる事もあるのである、であるから強ち恐怖を制さうとするよりも、寧ろ漸次に好い方面へ導

くと言ふ事が第一の要件である。

# 宗教は家庭の中心

高楠順次郎氏談

物質文明の勢力が日に増し盛んになつて社會の組